詩編 95 編の黙想（２０２３年８月２日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

創造主への喜びと感謝、そして、民の不信への主なる神の苦悩

ミシュナーによればこの詩は新年の詩であるとか。（ヴァイザー　41 頁）確かに、エルサレム神殿の礼拝者（巡礼者）への勧めの歌ではある。この歌は主に向かう喜び、感謝で始まっている。（１～３節）次に、天地万物の創造主である「主」（Yahweh）を讃美し、礼拝へと誘う。（4～６節）。そして、この創造主がイスラエルの民をご自分の民とされ、羊飼が羊を導き、護るように養い、イスラエルの民はそのみ声に従うべきこと（直接言及はされないが、選びと契約）が歌われる。（7 節）この主に聞き従うという主題の展開の中で、申命記が証言するように、心を頑なにしてはならないように戒められる。（7 節後半～10 節）。そして、喜びと感謝で始まった歌は、神の「怒り」の宣言、「警告」で終わる。なんとなく肩透かしを食らった感じではあるが、イスラエル、そして、更に、人間一般の心の頑なさへの洞察の徹底さが心に響いてくる。

顧みれば、私自身が初めて聖書を読んだ高校２年の時に感じたことは、人間の神を信じない、自己中心的な頑なさとそれにもかかわらず、人（イスラエル）を忍耐され、愛される神の懐の深さであった。その私の思いは、いまだに変わらないが、ここでは、神の慈しみと慈愛で詩が終わらず、神の「怒り」で終わっていることが印象的であろうか！ヘブライ語聖書の限界と言えば限界であり、詩編もまたキリストの到来を待ち、将来に開かれている。

１．主に向かって喜び歌おう(1 節～２節)

最初の言葉は「来い」「来よ」という呼びかけである。主（ヤハウエ）に来い、である。（新生 455「われに来よと主はいま、やさしく呼びたもう」参照）私はどこに、誰に向かうであろうか？何のために？この詩は、共に「歌う」ためにと言う。そして、共に喜んで叫ぶためにと言い、主は救いの「岩」であるという、慣れ親しんできた隠喩で招きと招きの目的を明らかにする。この救いの岩に来い。（新生 543「千歳の岩よ、わが身を囲め」を参照）感謝と詩篇を持って彼（主）の現臨（み顔）へと行こう。彼に向かって一緒に喜んで叫ぼう。

２．主は大いなる神（3 節）

なぜなら、Yahweh は偉大な神（エル)」とあり、そのお方を偉大なヤハウェであると告白・賛美する。Yahweh はすべての神を超えた大いなる王である。同じ「偉大な」が用いられ「神々」（ここでは諸王たち）を超えた、単なる比較ではなく、比較を超えた比類もなき「王」であると賛美している。

３．神のみ手による創造の保持:所有権（統治）は主にある（4～5 節）

3 節を受けて、関係代名詞が置かれ、以下のものは彼（主なる神）に、彼のみ手に（単数形）属していると謳う。「この地上の深い場所（複数形)」も丘（複数形）の高き処も彼に属している。また、彼に属する海も彼が造られ、渇いたもの（陸地）を彼の手（複数形）が形づくられたと賛美する。

４．礼拝への招き（6 節）

再び「来よ」との呼びかけがあり、創造主であるヤハウェのみ前に（み顔に）来て、共に礼拝し、

身を屈め、跪こうと招く。

５．われらは主の民（7 節）

7 節では、「彼はわたしたちの神」と呼び、「わたしたちは民である」（we are the people 「スタインベックの怒りの葡萄の最後の言葉」）と告白する。新生讃美歌 94 はロシア民謡「ステンカラージン」の曲で「我らは主の民」と歌う。この背景は神の選びと「契約」がある。そして羊飼―羊の隠喩が用いられる。「彼の牧場の羊（冠詞付きの単数形）である」と言う。羊飼は羊の名を呼び、羊は羊飼の声を知っている。相互の親しい信頼関係である。「契約」は「今日」という日に新たにされる。7 節の後半から「きょう、もし彼の声を聞くであろうなら」とある。

６．心の頑なさを棄てよ（7 節後半～10 節）

「あなたの心」を立腹したときのように固くするな。荒れ野の誘惑・試みのあの日のように。メリバとマサと地名として翻訳するかどうか？「荒野の誘惑」というヘブライ語がマサとメリバと同音である。出エジプト 17:1～７）あのとき、先祖たちは主に呟き、不平不満を漏らした。主の備えを見たにもかかわらずである。荒れ野の４０年は、主なる神自身も忍耐の 40 年であったが、（「いとう」とは「わたしは長く嘆いた」という意味））ヘブライの人々は、心の迷う民（心において錯誤する民）であり、神の道を知ろうとしない民であった。

７．主なる神の苦悩（11 節）

詩は主なる神の苦悩で終わっている。「私は怒り/彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った」。人間的に「怒り」は不信頼・不義・不正に対する正当な反応であり、これを迂回してはならないだろう。（ローマ 1:18 参照）「彼らに対してわたしは「私の怒りにおいて」誓った。「彼らは私の安らぎに入るべきではない。」パレスチナの約束の憩いの地に入れないというより、神の憩いに入るべきではないという方がきついと思う。

神を忘れやすい人の性を思い、キリストの到来、十字架に至る主の苦悩とよみがえりの解放の時の到来に感謝しよう。詩編は将来に向かって開かれている。その将来はイエスにおいて成就している。

それにしても「神の怒り」で終わるのはどうだろうか。8 節～11 節は新共同訳ではカッコに入れて引用文として理解しているから、7 節後半の言葉を最後に持ってくることもできようか？「あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように/心を頑なにしてはならない。あのとき、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。四十年の間、わたしはその世代をいとい/心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。わたしはいかり/彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った。」（しかし）今日こそ、主の声に聞き従わねばならない。」この方が腑に落ちるかも知れない。過去の歴史と現在の対比である。ヘブライ 3:7～11、II コリント 6:1～2 を合わせて読もう。